

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和5年度学校評価 結果

達成度(評価)	
A	: 十分達成できている
B	: おおむね達成できている
C	: やや不十分である
D	: 不十分である

学校名	小城市立小中一貫校芦刈観瀾校
1 前年度 評価結果の概要	<ul style="list-style-type: none"> 学習状況調査等の結果において7割程度の学年・教科で伸びが見られたが、依然として課題が残った。授業力向上と学習規律の定着により、学力向上を図る。 小中一貫教育については、校内研の充実により小中の協力体制が整った。小中合同の行事や活動、9年間を見通した学びの両面から小中一貫教育の充実を図ることができ、保護者や地域の理解も得られた。 いじめの早期発見、早期対応については、児童生徒に寄り添った教育相談や問題行動等に対する生徒指導力の向上を図る。
2 学校教育目標	ふるさとを愛し、未来を拓く、心身ともに元気な子どもの育成 ～「ともに」「つなぐ」小中一貫教育～
3 本年度の重点目標	<ul style="list-style-type: none"> 授業力 特別支援教育や教育相談 生徒指導力

4 重点取組内容・成果指標 5 最終評価

(1)共通評価項目			最終評価				主な担当者
評価項目	重点取組	成果指標(数値目標)	具体的取組	達成度(評価)		学校関係者評価	
				達成度	実施結果	評価	意見や提言
●学力の向上	○全職員による共通理解と共通実践・学習内容の定着に向けたわかりやすい授業の実践	●学力向上対策評価シートに示したマイプランの成果指標を達成した教師80%以上にする。	・教職員間でマイプランを共有するとともに、校内研修などにより取組の推進を図る。 ・随時、進捗状況などを確認しながら、確実な履行を進め、達成者を増やしていく。	B	・1月末時点でマイプランの成果指標を達成できた自己申告する教師は71.9%で、目標達成には至らなかった。教師それぞれが成果指標として設定した数値が、児童生徒の実態に即していなかった(成果指標の数値が若干高すぎた)ことが一因と考えられる。来年度は、すべての教師がマイプランの成果指標を断然と意識して取り組むための具体的手立てを考えていく必要がある。	B	・成果指標80%に達成していないものの、6か月で、52.7%の上昇はすばらしい飛躍であり、先生方の団結力そのものである。 ・達成できるような協力体制のような工夫をしてほしい。
	○学習規律の確立	○児童生徒のアンケート「よい姿勢で授業を受けている」、「授業開始時刻前に席に着いている」の達成率を、年度当初より向上させる。	・「学びの7本柱(学習規律重点項目)」を児童生徒に配付・確認し、継続した指導を粘り強く行う。 ・毎学期3回ずつ(年間9回)、「学びの7本柱」について、児童生徒が自己評価する場を設定し、改善を図る。	A	・1月に実施したアンケート調査で「よい姿勢で授業を受けている」に肯定的に回答した児童生徒が79.9%、「授業開始時刻前に席に着いている」に肯定的に回答した児童生徒が93.0%であった。どちらも年度当初より大きく向上しており、目標を達成することができた。今後は、「学びの7本柱」における定着率の低い3項目(よい姿勢・15分休みは平静にはつきり話す)について、これを改善するための具体的手立てを考えていく必要がある。	A	・よい結果の場合は、今後も続けてほしい。 ・よい姿勢がなぜいいのかが、開始時刻前に席に着くことがどういう効果をもたらすのか改めてしっかりと指示してもらい、100%を目指してもらいたい。
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○児童生徒の規範意識や思いやる心に関する質問で「当てはまる」と回答した児童生徒の割合を80%以上にする。	・友達の良いところやもらってうれしかったことを書いて掲示する「ほかほかの木」に取り組む。 ・年間計画に沿った道徳教育の実践に取り組むとともに、教育活動における心の教育の充実を職員が意識する。 ・人権・同和教育や平和学習を「いじめ防止・心を考える日」に合わせて全校で取り組む。	A	・12月のアンケートでは、児童生徒の規範意識や思いやる心に関する質問で、肯定的に回答した児童生徒が80%を上回ることができた。 ・「ほかほかの木」に小中合同で取り組み、ほかほか言葉について全校で考えることができ、お互いのよさを認める雰囲気が高まった。 ・毎月の人権教室や12月の人権集会を開催し、児童生徒の人権意識を高めることができた。	A	・子供は、褒めて育てることが大事だと思う。 ・学年ごとや年齢ごとに、思いやりや人権、道徳について学習できる機会を設けることも必要である。 ・ほかほかポストや給食の時間の放送など、いい活動。今後も、いろいろな取組を通じて、思いやりの教育を行ってほしい。
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○「何かあった時に学校に相談しやすい」と感じる児童生徒の割合を80%以上にする。 ○「いじめに対し、組織的に対応できている」と感じる職員の割合を90%以上にする。	・定期的に生活アンケートや教育相談などを行い、気になる児童生徒については職員間で情報共有を行う。 ・毎月10日の「いじめ防止・心を考える日」に合わせて、朝の時間に「いじめゼロ宣言」の読み上げ、エンカウンターなどの活動を取り入れる。 ・職員研修やいじめ対策委員会を設定し、組織的にいじめ防止に取り組む。	B	・毎月の生活アンケートや教育相談の実施等、気になる児童について早期に対応することができ、「アンケートや先生の日記りや相談により、いじめをなくすようしていると思う。」について肯定的に回答した児童生徒は90%で目標を達成することができた。 ・「学校の先生は、自分が困った時などに相談しやすい」という肯定的な回答をした児童生徒は7%で目標を達成できなかった。エンカウンターなどを積極的にを行い、支持的風土の醸成一層図る必要がある。 ・7月に全職員を対象としたいじめ対応研修の実施や、適宜いじめ対策委員会を開催したことにより、「いじめに対し、組織的に対応する体制が整備されていると思う。」について肯定的に回答した教職員は100%で目標を達成することができた。	B	・今後も早期対応や発見でき、その都度対応できるように配慮を続けてほしい。
	●児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動	○「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒の割合を80%以上にする。 ○「将来の夢や目標を持っている」として肯定的な回答をした児童生徒の割合を80%以上にする。	・エンカウンターを計画的に取り組む。 ・地域の方を招き、各学年の実態や学習に合わせて仕事についての話をしていた(時間をとる。 ・進路学習を系統立てて計画し、各学年で充実させる。	A	・毎月の人権教室で、テーマに合わせた話や体験活動を行い、振り返ったことを掲示して全校で紹介したり、先生からコメントをももらったりしたこと、「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思う」というについては、87%が肯定的に答えており、目標を達成することができた。 ・体験学習、生徒朝会等を通して、各学年ごとの目標や意識することを確認しながら、将来のなりた自分、理想の9年生について考え、レポート等にまとめ活動することができた。	A	・将来については、年齢によっても違う意識だと思うが、目標をもち続けられるように配慮、指導をお願いしたい。 ・教育相談週間で、児童生徒と向き合う時間を作る取組を継続してほしい。
●健康・体づくり	●望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成	○「健康に食事は大切である」児童生徒の割合を85パーセント以上にする。 ・家庭教育指針で「朝ごはんをしっかり食べる」の項目を年度当初より向上させる。	・全学年において、年1回以上栄養教諭が参画した食育の授業を行い、食への意識の向上を図る。 ・家庭教育指針を全学年で年3回行い、結果をその後の指導に反映させる。 ・「食育だより」や学校HP等を通して、食の大切さに関する情報を保護者や地域に発信する。	A	・11月の調査では「健康に良い食事をしている」児童生徒は、小学生は82%と少し減少したが、中学生は87%と大きく増加した。また、「健康であるために食事は大切である」と回答した小学生は97%から100%と増加し、食に関する意識が向上した。 ・12月の家庭生活指針では、「朝ごはんを毎日しっかり食べる」児童生徒は小学生79%、中学生73%と減少した。一方、毎日少しでも朝ごはんを食べる児童生徒が小学生は98%→99%、中学生は89%→93%と増加した。	A	・何をすることも健康が第一であるので、小さい時から体の形成のために偏らないよい食事をしてほしい。 ・改めて家庭にも朝ごはんの大事さを周知してほしい。
	○運動習慣の改善	○授業以外で運動やスポーツを行う時間が1週間で420分以上の児童生徒、小学校60%以上、中学校80%以上にする。	・家庭教育指針を全学年で年3回行い、結果をその後の指導に反映させる。 ・委員会活動で運動を行うイベントを開催する。 ・ボールの貸し出しを行い、休み時間に運動を行う機会を増やす。	B	・12月の家庭教育指針の結果では、小学部の達成率が54%、中学部が67%で、前よりは若干進んだものの、目標を達成することができなかった。 ・小学部では、運動委員会の働きかけで昼休みにドッチボール大会を行った。全校児童参加の取組みにより、昼休みに屋内で過ごすことが多い児童も外遊びの楽しさを感じることができたが、その後の外遊びへの発露にあまりつながっていない。昼休みだけでなく、業間休みにも外に出て体を動かす時間が取れると、より運動習慣が身に着くのでは、と考えられる。 ・中学部では、前回の結果から大きな変化がなく、運動部所属していない生徒の運動習慣改善が大きな課題となった。	B	・個人差はあると思うが、体を動かす機会づくりとして、運動するという意味では、重要だと考える。 ・これまでウォーキングは、脚力向上など効果が期待できるので、「声の子ウォーキング」と題し、昼休みにまず1周ウォーキング等、チャレンジしてみようか。
	○小・中学部がともに高め合い、進んで行動できる児童生徒の育成	○行事や活動後の振り返りにおいて、自身の成長を感じたり、更なる成長を目指したりする記述ができる児童生徒の割合を80%以上にする。	・異学年交流の実施と振り返りを行う。 ・主要な行事の前に意欲を高める活動を行い、活動への意欲を高め、活動後にはその振り返りを行う。	A	・文化発表会前には事前に児童生徒の気持ちや高まる機会が持てなかったが、各学年での準備練習を通して活動への意欲を高めることができ、積極的に取り組む児童生徒が多くなった。また、1～9年生までの合唱を聞き合い、それぞれの良さを感じられる場を設定することで、90%の生徒が振り返りにおいて自身の成長を感じたり更なる成長を目指したりする記述を書くことができた。	A	・実施したら、振り返る、そして改善していくという流れを意識して、これから取り組んでほしい。 ・小中一貫校の特徴であり、強みでもあるので、今後も積極的な教え合い、学び合いとともに、子供たちならではの企画・立案能力を向上を期待する。
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減 ●委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。 ●昨年度の時間外勤務時間の平均を5ポイント下回る。	・定時退勤日と部活動休業日の設定 ・長期休業中の年休取得促進 ・業務記録を把握し、意識の向上と業務の効率化に取り組む。	B	・定時退勤日の周知を徹底した。退勤時間を意識した仕事の仕方が定着している。 ・年休において、令和5年の職員一人当たりの年休平均取得日数は、小学部14.0日、中学部10.1日(昨年(小学部13.1日、中学部6.5日)を上回っていた)。 ・12月までの超過勤務月平均が、小学部39.9時間、中学部54.1時間であった。これは昨年度の同時期(小学部38.9時間、中学部60.5時間)に比べると小学部は同程度、中学部は大きく減少している。しかし、個人差があり、学期末や行事の前に、休日に学校で仕事をしている職員もおり、業務の平準化が必要である。	B	・小中一貫校なので、難しいところもあるが、それを活かせることもあると思うので、工夫して取り組んでほしい。 ・先生方の健康管理を十分に注意してほしい。 ・中学部が、来年度より単元テストを始めることで、定期テスト作成の負担を減らし、働き方の平準化につながることを期待できる。	

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目			最終評価				主な担当者
評価項目	重点取組内容	成果指標(数値目標)	具体的取組	達成度(評価)		学校関係者評価	
				達成度	実施結果	評価	意見や提言
○小中一貫教育の充実・活性化	○プロジェクト部会の活性化や校内研究の充実を中心とした、小中一貫教育推進体制の充実	○「小中一貫による9年間の教育活動が充実している」と感じている保護者の割合を80%以上にする。 ○「小中交流授業や小中一貫の取組が充実している」と感じる職員の割合を90%以上にする。	・プロジェクトごとに重点取組事項を設定をする。 ・小中教職員相互の授業協力体制の整備と小中交流授業の実施する。 ・学校だよりや学校HP等による情報発信する。	A	・小中合同の行事や小中交流授業など「小中一貫の取組が充実している」と感じている保護者の割合が93%、職員の割合が86%で目標を達成できた。 ・小中教職員相互の授業協力体制が整い、ITやGTなど小中交流授業を計画的に実施できた。教育センターやスーパーティチャーを講師に招き、定期的な指導や園々の研修により授業改善が図られ、成果を上げることができた。	A	・小中一貫校として、できることを増やして充実した学校生活を送ってほしい。
○特別支援教育の充実	○教員の専門性と意識の向上	○特別支援に関する専門性が向上したと感じる教員の割合を80%以上にする。	・特別支援に関する研修会を計画的に実施する。 ・ケース会議や情報共有の場を設定する。	A	・児童・生徒の具体的な事例に沿った研修や、ケース会議、日々の実践等を行ってきたことで、学校評価アンケートにおいて、99%の教員が、特別支援に関する専門性が向上したと答えており、80%以上の目標を達成することができた。 ・佐賀大学から月に1回、准教授を招聘し、インクルーシブデザインに立った授業改善を行った。小学部2学級、中学部2学級の計4学級の授業を参観していただき、書くことが得意、不得意を考慮したワークシートの工夫、集中方の継続時間に対応した学習活動の工夫等について助言をいただいた。	A	・時代時代に、様々な課題が変わると思うし、対応も変わるので、引き続き柔軟、かつ優しい対応をお願いしたい。
○コミュニティ・スクールの推進	○地域との交流や地域を生かした体験学習の充実	○「地域との交流や体験学習に積極的に参加している」と感じている児童生徒の割合を80%以上にする。 ○「学校の教育活動は地域との連携がなされている」と感じている保護者・職員の割合を80%以上にする。	・生活科・総合的な学習の時間で、地域(ひと・もの・こと)を学ぶ場を設定する。 ・地域との連携・交流を生かした活動の設定と工夫した活動を行う。 ・学校だよりや学校HP等による地域連携に関する情報発信を定期的に行う。	A	・小中どの学年も、地域学習や地域との交流、地域を生かした体験活動を設定し取り組むことができたが、積極的に参加できた児童生徒は67%で目標を達成できなかった。活動の内容や課題のたせ方の工夫改善が必要である。 ・「地域との連携がなされている」と感じている保護者は90%、職員は96%と目標を達成できた。特に、9年の町づくり会議への参加や年の未来の町づくりプレゼンテーションなど、地域の方とともに考える機会をもつことができ、地域貢献となる活動ができた。	A	・コミュニティスクールとして、地域やPTAと協力して充実できるように取り組むと思うし、今後の課題でもあると考える。 ・声刈町づくり組織が立ち上がっているの、今後地域とのつながりも増えていくと思う。

●…県共通 ○…学校独自 ◎…志を高める教育	<p>5 総合評価・次年度への展望</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習規律の確立のために、「学びの7本柱」を粘り強く指導したことで、学習に前向きに取り組む児童生徒が増えた。標準学力検査(CRT)の結果において、前年度よりほとんどの学年・教科で伸びが見られたものの課題も残った。職員一人一人の授業力向上と学習規律「学びの7本柱」の更なる定着で、学力向上を図る。 運動習慣の改善については、委員会によるイベントの企画実施を計画的に行ったり、徒歩登校の家庭への協力を依頼したりする。昼休みや業間休みを利用して、外遊びを呼びかける。 心の教育では、体験学習や活動等を多く取り入れ、情緒面の教育の充実を図ることができた。また、家庭との連携により食事の大切さを理解している児童生徒が増えている。
------------------------	--